青年期女子における社会的達成目標と適応との関連

日韓の女子学生の比較

○篠原由花¹・藤井勉²・瀧沢絵里

(¹ 学習院大学大学院人文科学研究科・² 誠信女子大学校日語日文学科)

キーワード：社会的達成目標、適応、青年期女子

The Relationship between Social Achievement Goals and Adjustment in Young Women

Yuka SHINOHARA¹, Tsutomu FUJII² and Eri TAKIZAWA

(¹ Graduate School of Humanities, Gakushuin Univ., ² Dept. of Japanese Language and Literature, Sungshin Women's Univ.)

Key Words: Social Achievement Goals, Adjustment, Young Women

目 的

これまで、学業場面における達成目標については多くの研究が行われてきたが、社会場面における達成目標 (Social Achievement Goals; 以下 SAG) に関する研究はあまり行われていない。Ryan & Shim (2006) は SAG の質問紙を作成し、SAG と“ポジティブな他者関係”、“自己受容”、“自己成長”及び“自律性”と関連があることを示した。一方、“自己受容”などに類似の指標と思われる“適応”と SAG の関連を検討した篠原他 (2012) では、一部 Ryan らとは異なる結果が得られている。このことから SAG と適応に関する指標との関係は、文化など社会的状況によって変化する可能性があるのではないかと予測された。そこで、本研究では SAG と適応との関係について日本及び韓国的女子学生を対象に検討を行った。

方 法

参加者 日本人女子 63 名、韓国女子 99 名。

手続き 日韓それぞれの大学の講義で一斉に実施した。

質問紙の構成 社会的達成目標尺度 (Ryan & Shim, 2006; 12 項目)、青年適応感尺度 (大久保, 2005; 30 項目) を使用した。どちらも 5 件法 (1:全く当てはまらない—5:非常によく当てはまる)。質問紙には他の尺度も含まれていたが、本稿では扱わない。

結果と考察

まず、SAG 及び青年適応感尺度の因子分析を行い、下位尺度を構成した。SAG は 3 因子を抽出し、“社会的発達 (社会的コンピテンスを発達させていくことへの注目と関連) ”、“社会的呈示接近 (社会的コンピテンスを他者に示し、自身が社会的に望まれているというポジティブな評価を得ることを焦点とする) ”、“社会的呈示回避 (社会的コンピテンスが欠落していないことを示し、ネガティブな評価や社会的に望まれていないことを示すようなことを回避することを焦点とする)”の 3 下位尺度を構成した。青年適応感尺度は 4 因子を抽出し、“居心地の良さの感覚”、“課題・目的の存在”、“被信頼・受容感”、“劣等感のなさ”の 4 下位尺度を構成した。どちらの尺度も先行研究と一致した構成となった。

次に、SAG 及び青年適応感尺度の相関分析を行った。結果を表 1・2 に示す。日本では、社会的発達は居心地の良さの感覚 ($r=.29$) と関連していたが、韓国では課題・目的の存在 ($r=.33$) 及び被信頼・受容感 ($r=.21$) と関連していた。また、社会的呈示回避との関連にも日韓で違いがみられ、特に劣等感のなさとの関係において違いが顕著であった。社会的呈示回避と劣等感 ($r=.34$) とが関係する日本人とは異なり、韓国の人にとっては劣等感よりも周囲からの信頼感・受容感 ($r= -.20$) の方が社会的呈示回避目標と関係することが示された。一方、日韓双方に共通する点として、社会的呈示接近と適応感との間に関係がみられなかったことが挙げられる。こ

れは、先行研究の結果とも一致しており、社会的呈示接近目標と適応に関する指標との関係が文化によりさほど変わらなことが示唆された。

さらに、日韓の SAG 及び青年適応感について t 検定を行ったところ (表 3)、日本人女子に比べ、韓国女子の方が社会的発達 ($t(159)=2.86, p<.05$) 及び社会的呈示回避 ($t(158)=6.09, p<.001$) 傾向が有意に高かった。また、劣等感については日本人女子 ($t(157)=6.11, p<.001$) において高いことが示された。韓国女子は日本人女子に比べ、社会場面においてコンピテンスを発達させることへの関心が高いと同時に、他者からのネガティブな評価を受けることを避ける傾向があった。このように、SAG と適応との関係はその参加者集団を取り巻く社会的状況により異なる可能性が示唆された。

本研究では女子学生のみを対象に検討を行った。今後は男子学生を含めた検討が望まれる。また、本研究で示された日韓の差が、どのような文化的・社会的な相違から生じているかについてはより詳細な検討が必要であろう。

表1. 日本的女子学生におけるSAGと適応感の相関

	居心地の良さ	課題・目的の存在	被信頼・受容感	劣等感のなさ
社会的発達	.29*	.17	.16	.09
社会的呈示接近	.17	-.20	-.08	.14
社会的呈示回避	.01	.00	-.12	.34**

表2. 韓国的女子学生におけるSAGと適応感の相関

	居心地の良さ	課題・目的の存在	被信頼・受容感	劣等感のなさ
社会的発達	.16	.33**	.21*	.14
社会的呈示接近	-.04	-.02	.02	-.07
社会的呈示回避	-.19	-.03	-.20*	-.16

表3. 国別の平均値とSDおよびt検定の結果

		日本		韓国		t 値
		平均	SD	平均	SD	
SAG	社会的発達	3.83	0.60	4.10	0.55	-2.86**
	社会的呈示接近	3.05	0.85	2.90	0.77	1.13
	社会的呈示回避	2.89	0.68	3.46	0.51	-6.09***
青年適応感	居心地の良さの感覚	3.63	0.66	3.46	0.69	1.50
	課題・目的の存在	3.83	0.76	3.87	0.59	-0.33
	被信頼・受容感	3.04	0.82	3.00	0.71	0.29
	劣等感のなさ	3.38	0.70	4.08	0.70	-6.11***

** $p<.05$, *** $p<.001$

主な引用文献

Ryan, A.M. & Shim, S.S. (2006). Social Achievement Goals: The Nature and Consequences of Different Orientations Toward Social Competence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 1246-1263.